



# Mine!

---

---

marin725

---

日本の童話よりも外国のものの方が好き。  
私はそんな、ちょっと変わったお子様だった。

物心ついて初めて読んだのも、やはり外国のものだった。

香港に旅行に行った時、両親は私に1冊の絵本を買ってくれた。「Mine!」というタイトルの、セサミストリートの本である。

挿絵もついているし文章も少なめだが、中身は英語。当時まだ4歳だった私に読めるはずがなかった。私はそれを母に声に出して読んでもらい、内容をかいつまんで教えてもらった。

ストーリーはいたってシンプル。

セサミストリートのキャラクター、アーニーとバートが最初は互いのおもちゃを「僕の!」と言って独り占めしているが、やはり一緒に遊んだほうが楽しいことに気づき、最後は仲よくおやつを半分こにして食べておしまい、という他愛のない内容だった。

魔女も出てこないし、わくわく心踊らされることも起きない。自分の日常に置き換えても十分起こりうるであろう普通の出来事なのに、私はそれをとても気に入った。可愛い挿絵と、単純な内容がその理由なのだと思うが、母が口にする英語の響きが好きだったのである。

意味は分からなくとも、異国の言葉がとても耳に心地よかった。けれど自分では読めないから、何度も「読んで」と母にせがんでいた。そしてそのたびうっとりした。

私とその本ばかり読んでいたので、母は新たな外国の絵本を買ってくれたが、だめだった。それは「Mine!」の単純な話とは反対に、ファンタジー要素が含まれていたからである。なぜか私は少しでも現実味のある本でないと興味を持たず、せっかく買ってもらった本を放り出した。

サンタクロースの存在は小学3年生まで信じていたのに、今思えば矛盾している。

その本がきっかけで、私は英語に興味を持ち始めた。小学生くらいの頃は、よく英語の教育番組

が放送されていて、それらを好んでよく見ていた。当時両親は忙しくしていたので、半分は寂しさを紛らわせるためだ。私には、あの絵本のようにおもちゃを取り合う相手がいなかった。

しかし英語番組を熱心に見ていたおかげで、簡単な単語やフレーズは覚えた。他の子供が知らないことを知っているのだと気づくと、誇らしくも思えた。

中学に入ってから始まった英語の授業は、私の一番好きな科目になった。先生の授業で新たな知識が私の頭の辞書に追加されていき、もっと英語を知りたくなった。

高校生になると、2年生になると留学できるシステムになっている文系のクラスに入った。毎日のようにさまざまな種類の英語の授業を受けて大変だったが、いい経験にはなった。一緒に留学したクラスメイト以外は全員外国人なんだから、毎日嫌でも英語で話さなければならない。ネイティブと臆することなく話せるようになったし、道で声をかけられても簡単な英会話くらいはできる語学力がついた。

大学も英文科に進み、ネイティブの先生と話す機会も多かったが、日本の大学だし、留学時代の苦労に比べればなんてことはなかった。

そして現在大学院で英語を専攻している。正直こんなに長い間英語と付き合うことになるとうちは、夢にも思わなかった。得意かどうかは別として、英語の響きが好きなのは今も昔も変わらない。

始まりは1冊の本だった。

どんどん本棚の中身が増えていって、私の周りは外国の本であふれていったが、「Mine!」を超える絵本は現れなかった。きっとそれと出会った時点で、自分と英語は切り離せないものになったのだろう。

この本は私の生まれた年に出版された。

とっくに成人式も終えてほとんどの絵本は捨ててしまったけれど、これだけはどうしても捨てられなかった。たとえぼろぼろになっても、手放すともう二度と手に入らないかもしれないこの本を、この先も古本に出すことはないだろう。

子供の頃のように「私の！」と主張することは少なくなった私だが、これだけは別。  
「Mine!」の2人のように、この本を誰にも渡したくはない。